

資料紹介 「御屏風下絵写」

はじめに

黎明館所蔵の玉里島津家資料に「御屏風下絵写」という資料があり、筆者が担当し、令和三年十二月二十一日～四年三月六日に黎明館で開催された企画展「玉里島津家資料展」に出陳された。本資料は、

「雑ノ

老番御長持木

公義ヨリ朝鮮国江被遣候

御屏風下繪

十双分

と墨書された、縦五・一・五、横二・二・八、高八・〇センチメートルの木箱に屏風状に折りたたまれて収納された二十一点の彩色画から成る（二点重複を含む）。「雑ノ老番御長持木」と見消があるため、以前は「御長持」に木箱ごと収納されていたと考えられるが、その詳細は不明である。包紙には

「朝鮮江被遣候

御屏風十双下画写」

と記されている。

二十一点の作品は全体にシミがあり、わずかに虫損が見られるものの、鑑賞を妨げるほどではない。細かく調べると、後述のとおり、文化八（二八一）年、第十二回の朝鮮通信使来日の際、朝鮮国王へ贈られた十双の屏風（以下、先学に倣い「贈朝屏風」と記す）の下絵写であることが判明した。

表 玉里島津家資料「御屏風下絵写」

画題	贈朝屏風の筆者	法量 (cm)	備考
1 日月老松古木梅図	狩野祐清邦信	右隻 45.9×109.3	
		左隻 45.9×111.0	
2 頼朝富士牧狩図	狩野探信守道	右隻 46.0×106.0	
		左隻 46.0×107.7	
3 頼信渡海・義家雁行乱知伏兵図	狩野伊川院栄信	右隻 47.0×106.6	
		左隻 46.5×107.0	付箋「義家鷹烈を乱す図」
4 博雅琵琶伝授・時秋笙曲伝授図	狩野友川寛信	右隻 47.5×111.5	
		左隻 46.9×110.0	付箋「時秋笙曲伝授」・「狩野友川」
5 桜町菊亭図	狩野洞白愛信	右隻 46.6×106.8	
		左隻 46.0×108.0	
6 牧牛野馬図	狩野春貞與信	右隻 46.7×96.4	
		左隻 46.7×95.5	
7 春秋花鳥図	狩野洞琳由信	右隻 46.3×107.1	付箋「春花鳥」
		左隻 47.0×104.7	付箋「秋花鳥」
8 春冬堂上放鷹図	住吉広行	右隻 46.5×106.8	
		左隻 46.6×106.6	付箋「桜町中納言」(ママ)
9 舞楽図	板谷桂意	右隻 47.0×108.0	付箋「板谷桂意」
		左隻 47.0×109.0	
10 四季大和山水図	狩野伊川院栄信	右隻 46.8×106.2	
		左隻 46.6×106.7	
		左隻 45.5×105.5	左隻のみ重複1点あり

※ 備考欄の「付箋」は、端裏に貼られているものである。

崎
山
健
文

一 先行研究と画題

贈朝屏風については、既に榊原悟氏の著作『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』(ペリかん社、二〇〇二)・『屏風と日本人』(敬文舎、二〇一八)によつて基本的な事項が整理されており、当館所蔵資料に関すること以外はこちらに譲りたい。美術史を専門としない筆者が、拙いながらも当資料の位置付けを行い、展示にまで漕ぎ着けたのは、偏に同氏の業績に負うところが大きい。心より感謝の意を表したい。

さて、箱書き・包紙の情報と、繊細かつ活き活きとした筆遣いを見れば、誰もがまず始めに朝鮮通信使に関する作品であることを疑うであろう。そこで、幕府が編纂した対外関係史料集である「通航一覧」等を元に同氏がまとめられた歴代の贈朝屏風一覧にある画題と一致するか試みたところ、文化人(一八一一年)の第十二回の画題と概ね一致した。概ねというのは、二双について若干の問題があるからである。

「通航一覧」巻百二に該当の筆者・画題が記されており、これを東京大学史料編纂所所蔵本により見てみると、「同 友川筆」と記された下の割書右に「博雅琵琶伝授」、左に「時秋笙曲伝授」とある作品(写真四)について一つの疑問が生じる。作品を見ると、「博雅琵琶伝授」には紅葉等秋の植物が見え、「時秋笙曲伝授」には桜等春の植物が描かれている。割書右が右隻、左側が左隻に該当するのが通常だとすれば、右隻に秋、左隻に春の配置となる。

一方、両逸話の時系列を見てみると、前者は、源博雅が天元三(九八〇)年に没しているため、十世紀の出来事である。これに対し後者は、笙曲を伝授する源義光が後三年の役(一〇八三〜八七)で奥州に下る際の逸話と見られることから、十一世紀の出来事である(金井紫雲編『東洋画題綜覧』)。したがって、季節よりも出来事の時系列を重視したと考えれば、この配置でよいことになる。

因みに、右隻と左隻で逸話の年代が異なる作品は、この他に一覧表中の三と五があるが、いずれも右隻の逸話の方が古い(『東洋画題綜覧』)。

この時の画題を記した別の資料「朝鮮信使来聘一件書類」(東京大学史料編纂所蔵)も「通航一覧」と同様の記述であることも踏まえ、本稿では取りあえず「通航一覧」に従い右隻・左隻を決めたが、諸賢の見解を俟ちたい。

次に取り上げるのは、板谷桂意筆「舞楽図」(写真九)である。先と同様に「通航一覧」を見ると、「板屋(谷)桂意筆」の下の割書右に「内垣代付 舞楽左青海波」、同左に「林臺古散手貴徳狛鉾打毬」と記されている。垣代とは、青海波の舞楽の時、楽器を奏する人達が楽屋の外に出て垣のように舞人を取り囲んで並ぶのをいう(『日本国語大辞典』)が、左隻の右側に並ぶ人々がこれに当たる。その左側に林(輪)臺、青海波を描く。これに対し右隻は、左から貴徳、散手、狛鉾と続く(「舞楽之図」国立国会図書館蔵)。したがって、この割書は、「内垣代付 舞楽 左青海波、林臺、古散手、貴徳、狛鉾、打毬」と読むと考えられるが、当館の下絵写には「打毬(巻)」に該当する部分はない。或いは完成した屏風には追加されているものか。また、「古散手」という舞楽は未詳であるが、「古」が「右」の誤写だとすれば、ここより下は右隻となり、意味が通る。可能性としてここに挙げておきたい。

二 早稲田大学図書館所蔵「春冬堂上放鷹之図」(写真十一)との比較

早稲田大学図書館所蔵「春冬堂上放鷹之図」は、加藤秀幸氏が「研究資料 住吉広行筆春冬堂上放鷹之図屏風下絵及び朝鮮信使来聘一件書類」(『美術研究』二六七号)で紹介されており、端裏書に

「文化五戊辰年十月朔日納

御老中御掛 牧野備前守殿

朝鮮国王ニ被遣候御屏風

と記されていることから、第十二回通信使の贈朝屏風の下絵として知られている。当館の下絵写（写真八・右隻）と比較してみると、大きな違いは、法量が原寸大と考えられるほど大きい点（縦一六五・四、横四三三・四センチメートル）と、淡彩で描かれ色使いがほとんどわからない点、そして左隻を欠く点である。

一方、その構図は、樹木の位置や伸び方、人物の配置や佇まい、鷹が雉を捕えようとする姿など、酷似しており、当館資料が同じく第十二回の下絵の写であることが確定したといつてよいであろう。

ただし、この二点の作品には相違点もある。早稲田大学所蔵品は第一扇の幔幕内の人物が一人多く、第三扇の犬飼の奥手に同じく一人多い。したがって、この二点は制作時期が異なる筈である。前述の『美の架け橋』は、この時の制作過程を、画題の決定・筆者の決定↓正式下令↓伺下絵↓本画制作↓提出、とまとめている。さらに同書は、「朝鮮信使来聘一件書類」・「御屏風之記」（宮内庁書陵部蔵）の記述から、端裏書の文化五年十月には既に屏風に表装されていたとする。これを基に考えれば、早稲田大学図書館所蔵の下絵は、伺下絵を経て、これに修正を加え、本画制作のために新たに作られた、完成した屏風に極めて近い下絵とみてよいだろう。それに対し、当館所蔵品は、その前段階の伺下絵を写したものであるということになる。

三 馬の博物館蔵「巻狩図屏風」（写真十二）との比較

横浜市の馬の博物館に「巻狩図屏風」という六曲一隻の屏風が所蔵されている。第六扇の左下部に「藤原守道」と署名があり、第十二回の贈朝屏風「頼朝富士牧狩図屏風」と同じく狩野探信守道の作である。また、縦一六八・九、横

四三一・二センチメートルとかなりの大振りであり、前述の早稲田大学図書館蔵の下絵とほぼ同サイズでもあるため、贈朝屏風である可能性を検討してみよう。

これを当館の作品（写真二・左隻）と比較し共通点を挙げると、第一扇の手前の樹木の形。進行方向はそれぞれ異なるものの、「曾我物語」に見える大猪に後ろ向きに跨がる仁田四郎。第二扇手前の樹木。奥手の丘で単騎見おろしている騎馬武者。第五・六扇手前の樹木。奥手の建造物。第六扇手前の水場。山間に見える獲物を運ぶ場面等がある。この他にも諸所に同じポーズの人馬・動物が散見される。

一方で、地形の描き方や、人馬・動物の数や配置等、相違点も多い。先に述べたとおり、当館所蔵品が伺下絵の写であろうことを考慮すれば、修正が加えられ、より洗練された屏風として完成したとみることもできるが、これを断定できるほどの経験・能力もないため、諸賢の見解を俟ちたい。

四 なぜ玉里島津家資料に

（一）古藤養山惟旭

それにしても、これらはどのような経緯で玉里島津家に収蔵されることになったのだろうか。これを知る決定的な資料は現在のところないが、ひとつの仮説を提示したい。

第十二回通信使の「贈朝屏風」を制作したのは九名の御用絵師であったが、そのまとめ役「頭取」を務めたのは、奥絵師四家の一つ木挽町狩野家の狩野養川院惟信（文化五年正月に死去。嫡男伊川院栄信が引き継ぐ）であった。この養川院のもとに、当時薩摩藩の絵師古藤養山が弟子入りしていた。「古画備考」の記述を見てみよう。

「古藤養山惟旭 号松雪齋

薩州侯画師ニテ、木引町ノ高弟ナリ、諸方ノ古画鑑定ヲ取次キ、師家ノ家事ヲモ預ル、但長屋ニ別ニ構ヘ住シ、屋敷奥医師格ニナル、弘化丙午年九月廿四日没、年七十餘、法名人神院、但薩州画家十五人有之、皆狩野流也、

このように、古藤は師家で確固たる地位を占めていたと考えられる。『美の架け橋』で考察されているとおり、贈朝屏風の下絵を十双分全て頭取がとりまとめ、伺下絵として幕府へ提出したとすれば、古藤の存在は、これに触れる機会と写しを作成する能力や権限を持つ薩摩藩関係者として注目に値する。同書は伺下絵の幕府への提出を文化四年と推定している。古藤が関与しているとすれば、当館の下絵写の制作年も同年のことかと推測される。

(二) 島津斉宣と古藤

写した人物が仮に古藤だとして、これが玉里島津家資料中にあることから、背後にこれを命じた人物がいたはずである。しかし、贈朝屏風の下絵写が当館のようにまとまって存在する例は他になく、恐らくは第三者が模写することは禁じられていたのではないか。そのような状況でこれを古藤に命じることができるのは、当時の藩主島津斉宣（九代藩主、一七七三〜一八四一）か隠居島津重豪（八代藩主、一七四五〜一八三三）くらいであろう。ただし、重豪が隠居したのは天明七（一七八七）年である。古藤家の系譜的史料はないため、確かなことはわからないが、先述の「古画備考」によれば古藤はその時まで十代前半と推定できるため、斉宣の代に元服、もしくは召し抱えられた可能性が高い。

時代はやや下るが、斉宣の「内用留」（東京大学史料編纂所蔵）文政二（一八一九）年十月十一日の記事に、斉宣が内密に老中首座水野忠成とのパイプを築こうとした時、まず水野家の茶道を取り込もうとし、知人であるとして古藤に間を取り持たせている記事がある。古藤は時に斉宣の内密の用事のために働くことがあったことを示唆しており、興味深い。

因みに、島津斉宣は、文化六（一八〇九）年に父重豪によって隠居させられ、その後も江戸に住み続けた人物であり、十一代将軍徳川家斉の御台所寢子（茂姫・広大院）の弟に当たる。文政二年以降は寢子と内密の連絡通路を持つことになるが、文化年間には二人の間に私的な接点はまだない（拙稿「武家から興入れした御台所」（東京堂出版『論集大奥人物研究』二〇一九）。したがって、御台所の力を利用して下絵写が制作された可能性は低いと考えられる。

(三) 島津宗家から玉里島津家へ

玉里島津家資料と斉宣関連資料の関係をみてみよう。玉里島津家とは、維新の功績を認められ、明治四（一八七二）年に島津久光が新たに興した家である。「玉里」とは、島津家の別邸の名であり、これを建造した島津斉興（久光父、十代藩主、一七九一〜一八五九）の御印「玉印」に因むものである。したがって、玉里島津家資料は久光以降の資料が大半を成すが、晩年を玉里邸で過ごした父斉興の関連資料もある程度まとまって存在する。さらに、京都の飛鳥井家へ入門するほど歌道に傾倒した祖父斉宣の資料も、歌道関係資料がほとんどではあるがまとまってある。これに関しては、和歌・漢詩への造詣が深い久光が、自らの手許に置くため、島津宗家から移動させたと推測できる。下絵写も同様に何らかの理由で久光の目に留まったものであろうか。

五 その他の屏風下絵

最後に、本件との関係は不詳だが、同時期の同様の資料が玉里島津家資料にあるので、紹介しておく。「仙洞六十御賀御屏風一雙下絵」（写真十三）・「仙洞七十御賀御屏風一雙下絵」（写真十四）の二点の屏風下絵である。前者は「寛政十一年十一月廿六日 画土佐土佐守光貞筆 奉行民部卿雅威卿」、後者は「文化六年十二月十四日 画鶴沢探泉筆寫 奉行冷泉前大納言為章卿」とそれぞれの

包紙に記されている。このうち後者は、現在宮内庁書陵部に同様の下絵（「仙院七十御賀御屏風面様」）が収蔵されている。「仙洞」とは、ここでは後桜町上皇を指す。包紙によれば、後桜町上皇の長寿を祝い、朝廷の主導で制作された屏風ということであろう。

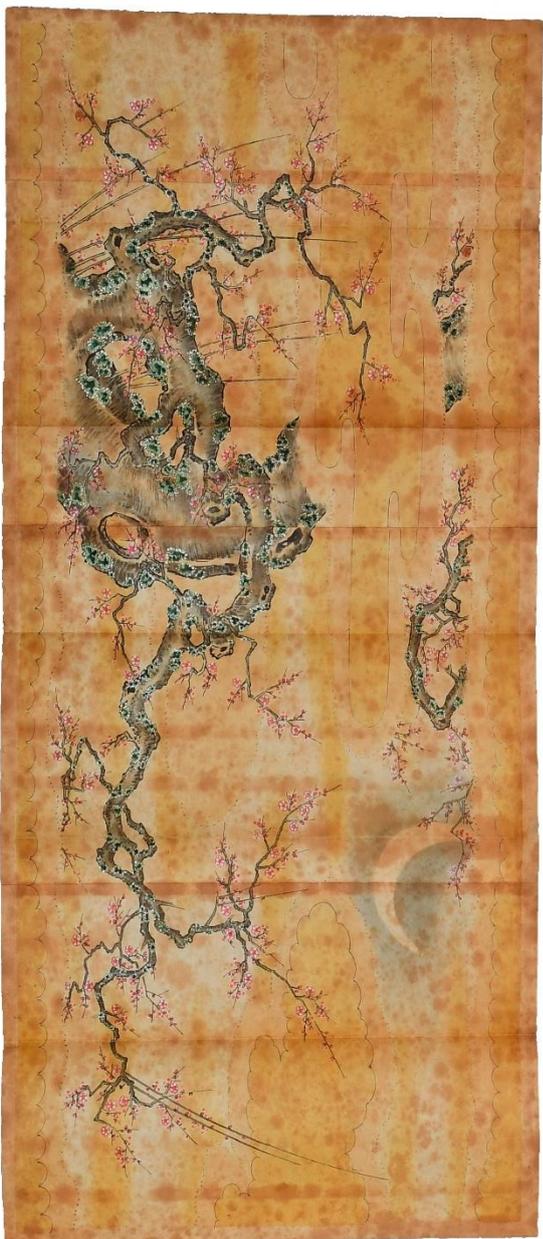
この下絵が島津家に伝来したのはなぜだろうか。注目すべきは、寛政十一年の奉行「民部卿雅威」こと飛鳥井雅威である。飛鳥井家は代々蹴鞠・歌道を家業とするが、先にも述べたように、島津齊宣は文化三（一八〇六）年から歌道の門人であり、玉里島津家資料中に親しい書状のやり取りが確認できる。また、二つの包紙の筆跡は同一であることから、双方とも文化六年十二月十四日以降に書き入れられたものである。本資料が、飛鳥井家とのやり取りを含む齊宣の歌道関係の箱に収納されていることを併せ考えれば、二点とも飛鳥井家が関与している可能性が高い。もともと、この屏風は上部に色紙形を設け、そこに詠進された和歌が入るものであり、歌道に傾倒していた齊宣の興味の対象は、屏風そのものではなく、これに付随する和歌だったのかもしれない。

文化四年に贈朝屏風の下絵写が作成されたとすれば、島津家は僅かな期間に国家レベルで作成された屏風の下絵もしくはその写しを入手したことになる。単なる偶然か、または何か理由があるのか判然としないが、念のためここに挙げて置く。因みに、玉里島津家資料にある屏風下絵関係の資料はこれが全てであり、他の時期に蒐集した形跡はない。

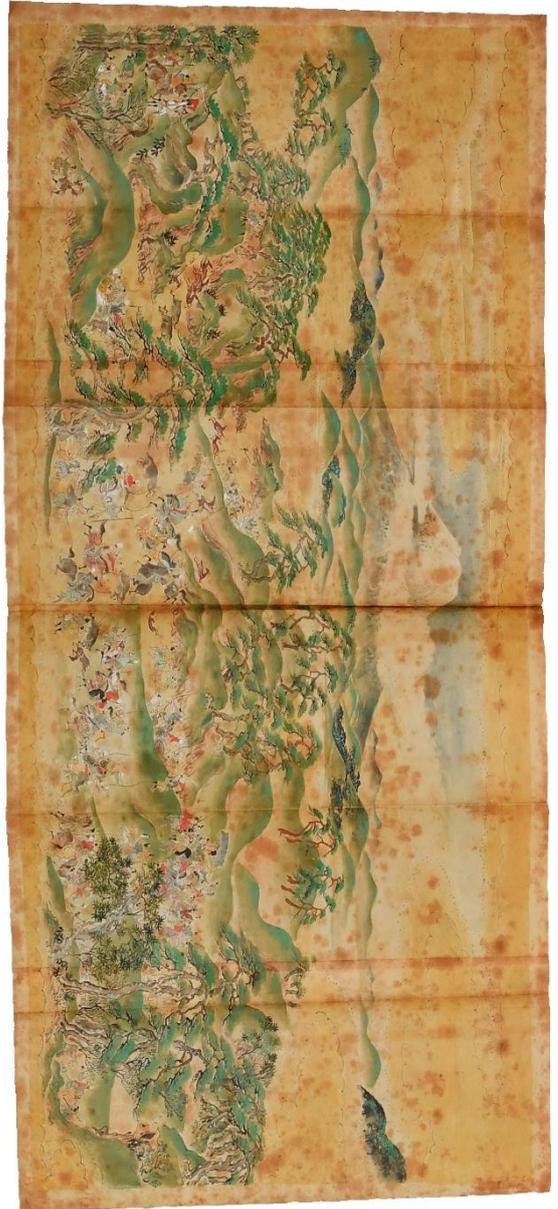
このおよそ百年前の宝永三（一七〇六）年、四代藩主島津吉貴（一六七五～一七四七）が、狩野常信（木挽町狩野家）門下で薩摩藩に仕えた絵師坂本養伯の屏風一双を、近衛家を通じ、東山天皇へ献上している事例もあり（『鹿児島県史料 旧記雑録追録二』二二三八～四一四号）、これも付記しておく。

仮説や推測が多い文章にはなつたが、まずは諸賢の研究の俎上に載せていただければと、汗顔の至りながら筆を執つた次第である。他にも作品の出来映え等、アプローチすべき課題は多いが、後考を俟ちつつ擱筆したい。

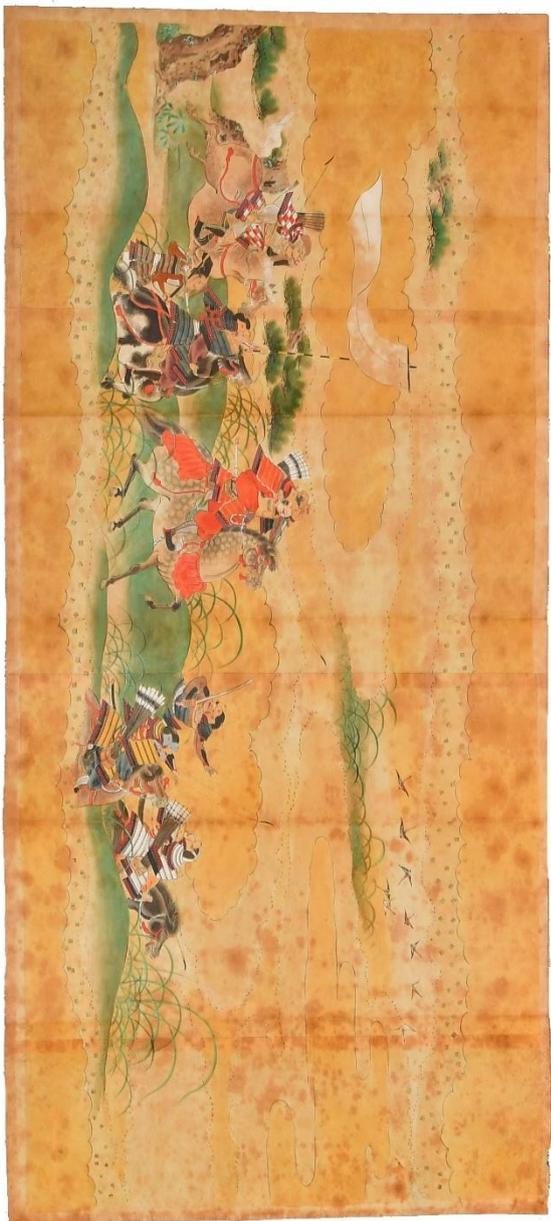
（さきやま たけふみ 学芸課学芸専門員）



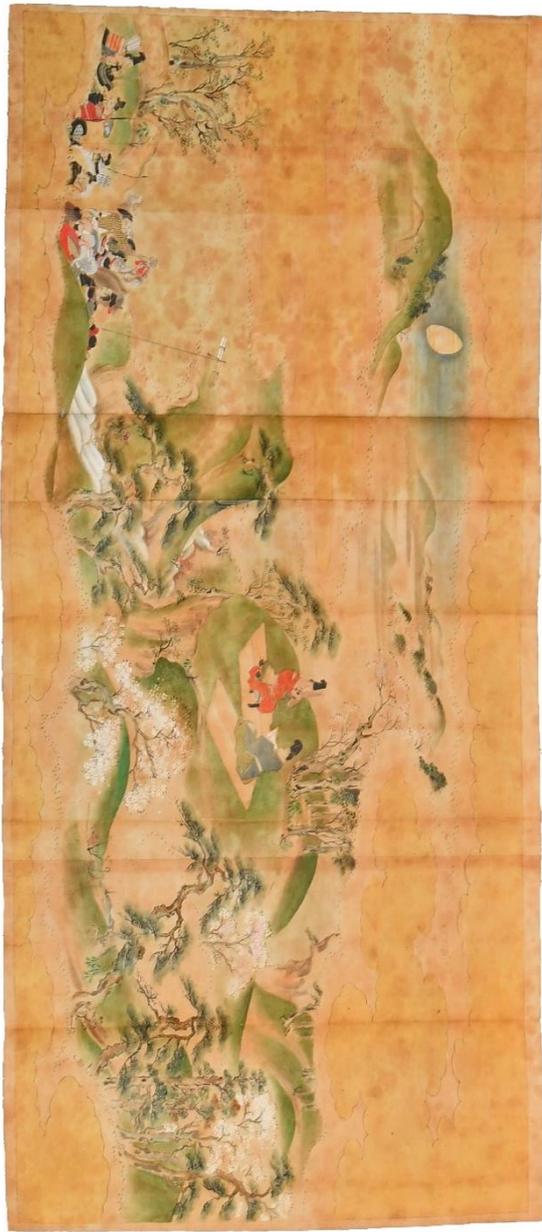
1 日月老松古木梅图



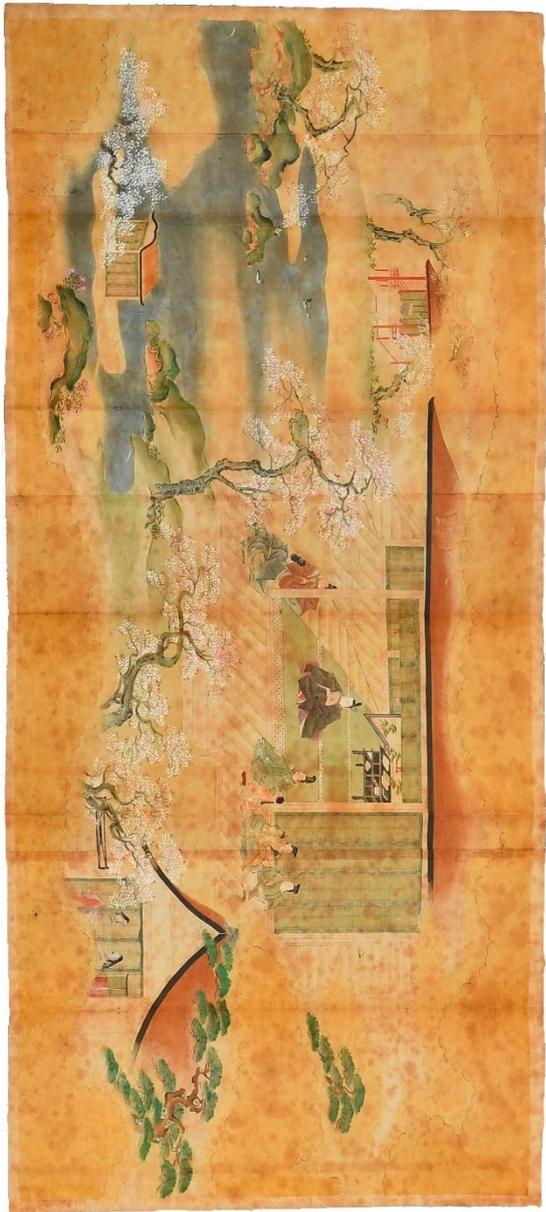
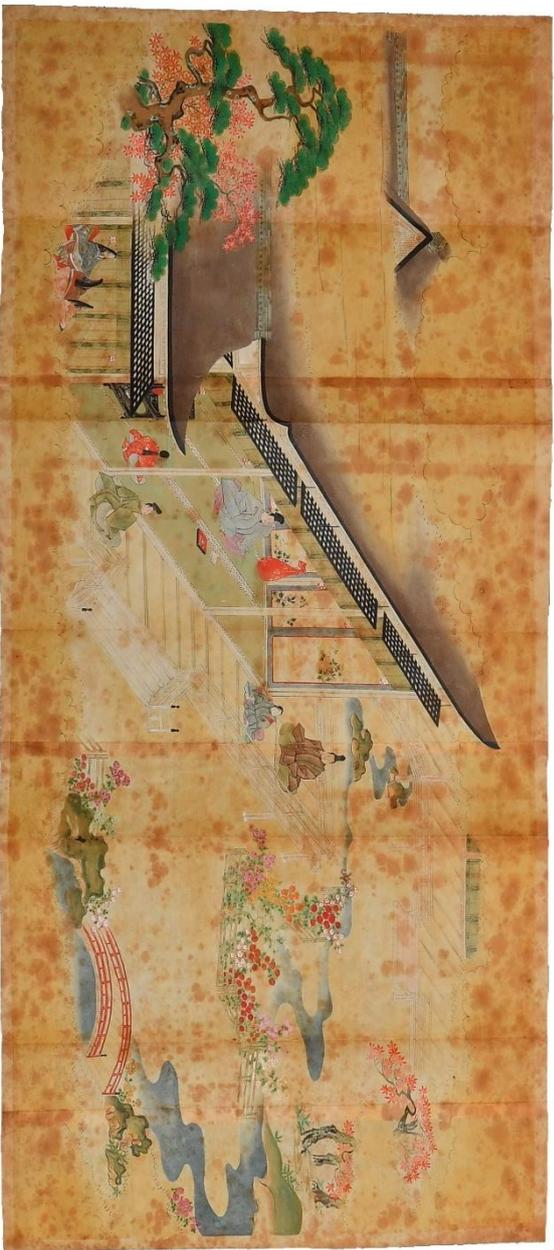
2 頼朝富士牧狩図



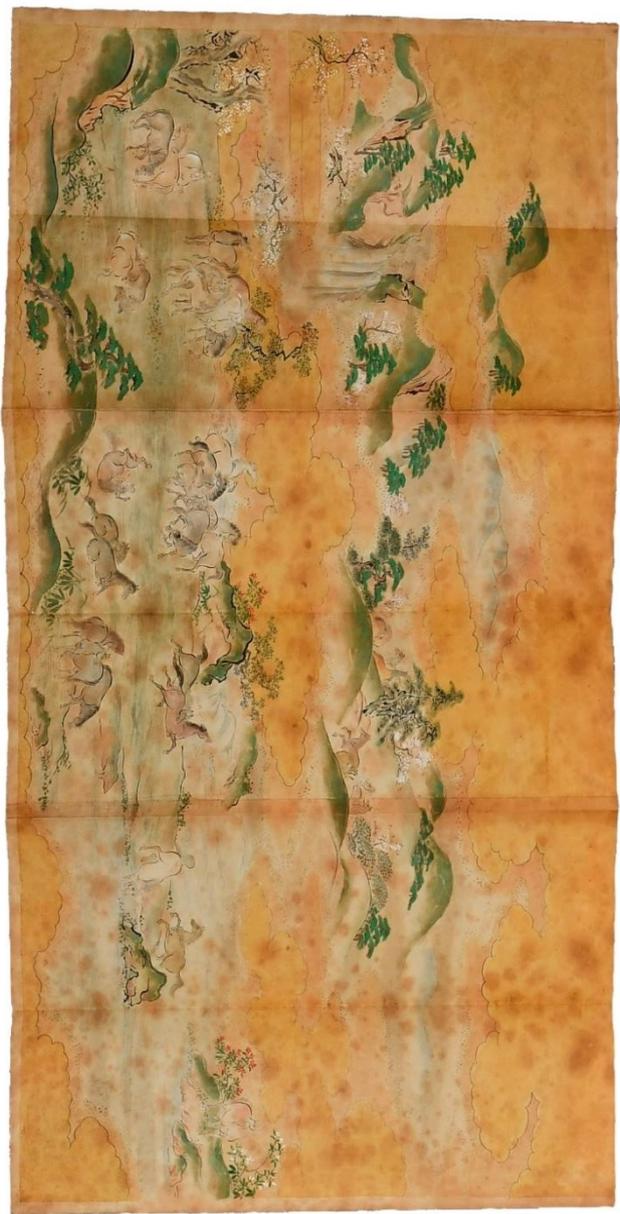
3 頼信渡海・義家雁行乱知伏兵図



4 博雅琵琶伝授・時秋笙曲伝授図



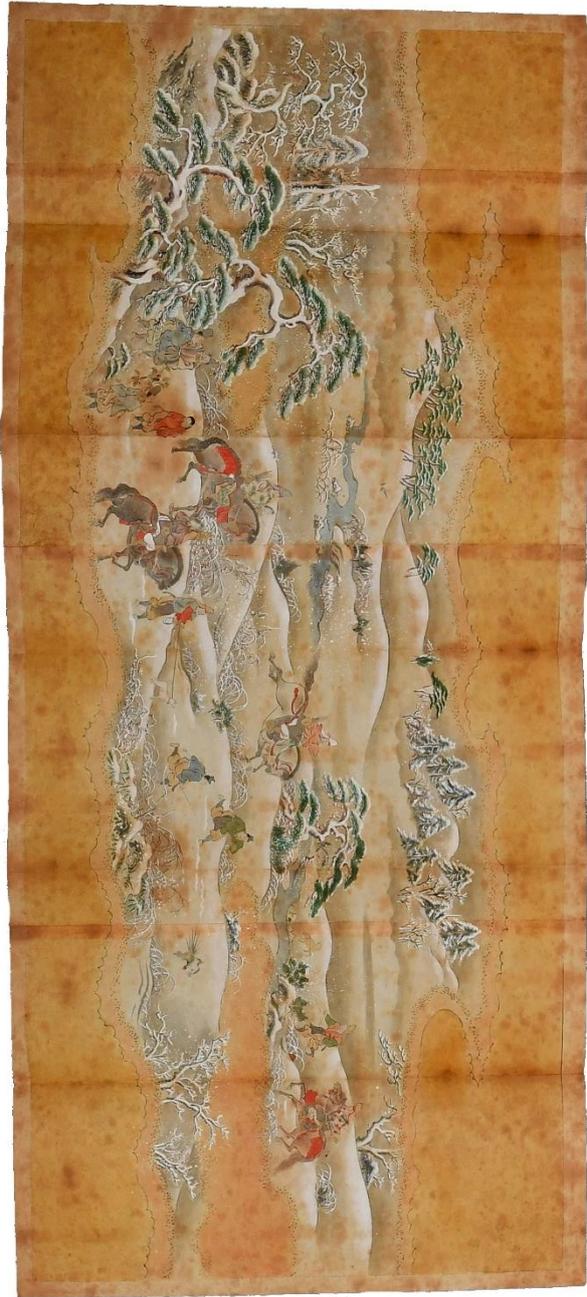
5 桜町菊亭図



6 牧牛野馬圖

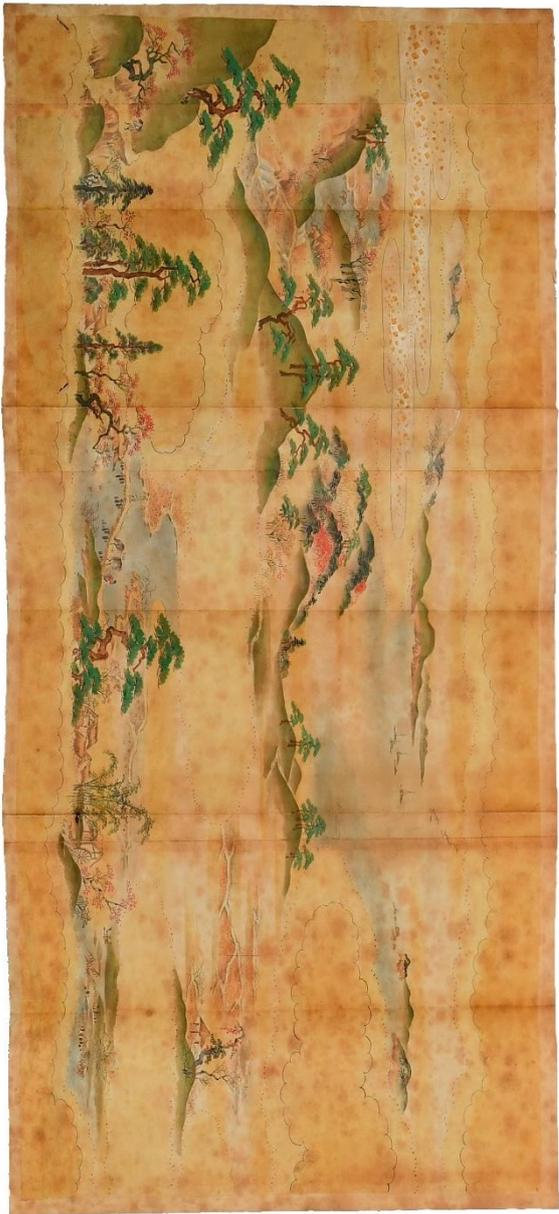


7 春秋花鳥圖

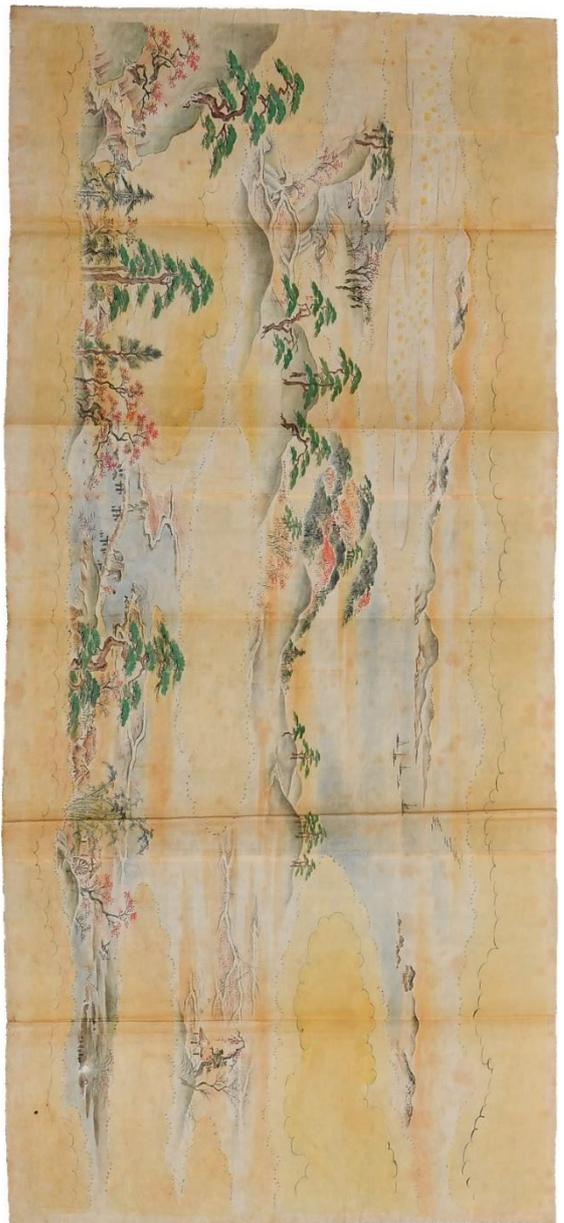


8 春冬堂上放鷹圖





10 四季大和山水图



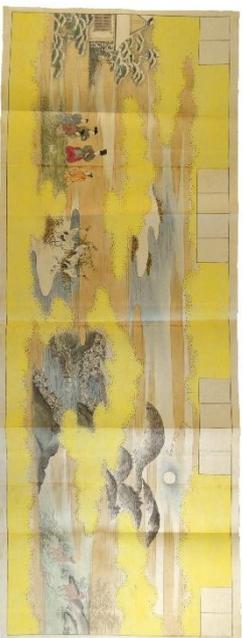
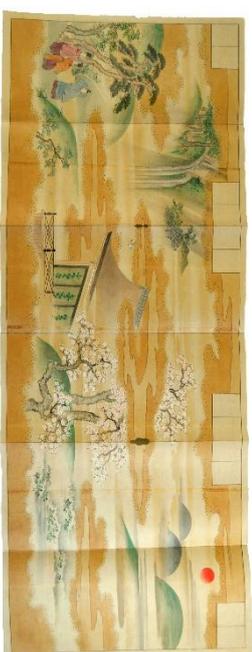
10 四季大和山水图 (左隻)



11 春冬堂上放鷹之图
(早稲田大学図書館所蔵)



12 卷狩図屏風
 (馬の博物館所蔵)



13 仙洞六十御賀御屏風一雙下絵 (玉里島津家資料)

14 仙洞七十御賀御屏風一雙下絵 (玉里島津家資料)